

Title	西欧中世における民衆宗教運動と言語
Sub Title	
Author	坂口, 昂吉(Sakaguchi, Kokichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1994
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.63, No.3 (1994. 3) ,p.91(311)- 102(322)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム「文明語の比較社会史：漢文,オスマン語,中世ラテン語」 一九九二年度三田史学会大会
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19940300-0091">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19940300-0091</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 西欧中世における民衆宗教運動と言語

坂口 昂吉

近代初頭のキリスト教的人文主義者デシデリウス・エラスムスは、ギリシア語・ラテン語をほとんどネイティブ・ランゲージと同様に駆使しておりました。彼は親友トーマス・モアの家庭でいつも快適に滞在していたが、ただ一つ不満がありました。それは、モアの夫人がラテン語を解さなかったことであります。これほどラテン語の世界に浸っていた彼に対しても、辛辣な、けれども誠にもっともな批判がございます、即ち、一生の間、母国語で祈った経験のないものに真の信仰があるはずがない。エラスムスは読み書きはもちろん日常生活まですべてラテン語で通した。彼には、母国語であるオランダ語の著作がないばかりではない。社交にも日常生活にもそして祈りにもオランダ語を使った痕跡すらない。したがってエラスムスは聖書学者として如何に偉大であろうとも、

彼の内なる信仰は甚だあやしいものがある、というのであります。これは真をうがった深刻な追及であるといえましょう。ただエラスムス個人については、幸いにも、この批判を強力に打ちかえす逸話がございます。一五三六年六月十二日夜半、バーゼルで臨終の床にあつたエラスムスは、「イエズスよ憐み給え、主よ救い給え、主よ我を逝かしめ給え、主を我を憐み給え」とラテン語で唱えたあと、最後に「我がなつかしき神よ」(Lievêre God)と一言オランダ語でつぶやき息絶えたのであります。この逸話はエラスムスの心のもっとも深いところにともつていた信仰の炎を示して余りあるものといえるであります。

それはともかく、このエラスムスの信仰に関する疑惑とその解消という話から、三つのことが考えられます。

第一はギリシア語・ラテン語というような普遍的教養語だけでは、生の信仰ないし新しい信仰は充分に表現しえない、それにはどうしても地方的な母国語ないし大衆的な日常語の助けを借りなければならぬということ。第二は、第一の点から類推すると、新しい宗教運動が生ずる場合には、多くの場合、地方的な母国語ないし大衆的な日常語にその表現を借りるのではないか、ということとであります。さらに第三は、このような場合には、殆んどと云っていい程、普遍的な教養語と地方的な母国語ないし大衆言語の間に接触と摩擦がおこり、深刻な相互影響が生ずると考えられるのであります。

このような観点から、特に西洋中世の民衆宗教運動と言語の関係について考えてみたいと思えます。だが中世の民衆宗教運動と言っても長い時代にわたり各地で多くのものがありますので、十二世紀後半、フランスで発生したワルデス派と、十三世紀前半イタリアで発生し教会に吸収されてフランシスコ会という修道会になったアシジのフランシスコの運動とを取りあげることに致します。一般に思想というものは、これが発生してからすぐにその全貌を現すことはないものです。もちろん初めからある萌芽はあるけれども、その芽が生長して世界に発展

していくには時間を要します。それはキリスト教の発展の歴史でも全く同じであります。キリスト教は古代末に発生した時すでに、教会の公式な認可を受けた信仰箇条を網羅していました。けれども教義的に信仰箇条が決定されたということは、その意味内容が人々に理解され、特に新しさが自覚されたということではありません。教義に内包されていた斬新さが展開してくるには、長い時間を経て、即ち古代を通過し中世に深く入ってからであると考えられます。

さて古代では教義として確定したキリスト教の教えの中には、大ざっぱに言って二つの傾向が内包されていたと思えます。一つは神の超越性を強調する傾向であり、充分認識されていて、古代教会における教義決定の時点ですでに充分に明瞭であったと思われれます。多くの古代教父の著作や、中世初期の学者たちの中で、神はこの世を超えて偉大であるという賞讃や、神の永遠性や絶対性を被造物の有限性や相対性と対比する説明・論述は限りなくあると思えます。キリスト教における超越性の理解がこのように早くから生じた理由は、これが当時のキリスト教徒になった学者たちにとって理解しやすい面で

あったからではないかと考えます。またこう言うことが許されるなら、キリスト教の超越性とは、たとえ同一ではないにせよ、ギリシア・ローマの思想・哲学の中に、それと類似した性格が含まれていたのではないかと思えます。即ちキリスト教に改宗したギリシアやローマの哲学者たちは、自分たちが本来もっていたものと相似た思想をキリスト教の教義の中にみつめて、これを論じあげた、と考えられるのであります。

けれどもキリスト教の教義に含まれていた教えにおける第二の傾向については、西欧の人々における理解が大変遅れたと考えられます。その第二の傾向とは、強い現世志向であります。即ち、キリストは神でありながら眞の人となった、それも人間として理性も感情も意志も、そして肉体をもあわせもった完全な人間になった、いうことの強調であります。これはギリシア・ローマ思想にも東洋の諸思想にもみられないキリスト教独自の思想であります。それはすでに古代教会の教義の中に明瞭に唱われておりました。けれどもそれは、古代的な学問的伝統のわくにおよそはまらないものであったために、古代教父の関心をひかず、理解の外に立たされたのであります。中世に入っても、十二世紀頃に至るまでは、この現

世志向の側面は無視されました。なるほど中世の中葉以前のキリスト教は、キリストが眞の神でありながら眞の意味で地上の人間となったという原則は否定しませんでした。けれどもそのキリストのイメージは万軍の主であるとか、第一の將軍であるとかでありました。そしてキリストは三位一体の第一の位格である御父とともに天上にあつて人々を見据えているもののみ思われておりました。即ちキリストは我々人間をはるかに超えた高いところにあつて、我々を見張つており、罰したり褒美を与えたりする存在とのみ考えられておりました。そこには、眞の人間のもつ痛み・苦しみ・悲しみ・弱さという面が全く欠如していたのであります。

ところが、時代がたつて中世の中葉から末期になると、このようなイメージを変えるように働きかける諸々の要因が登場してきます。まず十一世紀以降、遠距離貿易の勃興とか、莊園社会の中で余剰生産物がでるとかにより、中世都市の台頭が生じます。ここに莊園制による固定化した社会に變つて、商業化・手工業化・都市化と共に経済的に流動した社会が生じます。そしてこれがキリスト教会の中にも大きな影響を与えてくるのであります。それは、新しい経済の波に乗って成長してきた新興市民階

級、あるいは貴族の下層にありながら商業に手をだしてさらに成り上がった者、そういう人々がキリスト教の中に新しい信心を吹き込んだからであります。中世の初期では、農業的に固定化した社会であつて社会変動がありませんでした。ところが今や、市民たちは商業の上で成功する、失敗する、非常な富を成すかと思つたと忽ち落ちぶれる、という変化の中に巻き込まれたのであります。

このような社会で成功した市民たちは、落魄れたかつての仲間をみるにつけ、安閑としていられなくなつたのです。彼らはかつてのように聖職者が与える儀式に満足し、修道士たちに後生の祈りを託して安心してはいられず、自分自身の行いと信心でもつて、自分が救われることの証しを立てたいという気持ちに駆り立てられたのです。そこで彼らの中に新しい清貧をめざす民衆宗教運動が起つてくるのです。これは、キリスト自身が貧しかったごとく、自分たちも財を捨てて貧しくなり、そのことによつてキリストが与える救いに与かる、という精神の展開であります。

ただ、このような民衆宗教運動の展開に至るまでに、私は言葉の問題があると思つてあります。新しい民衆宗教運動の、即ち中世市民の宗教運動の創始者たちは、

教会の高位聖職者でもなければ、高度の神学者でもなく、いわゆるスコラ学者でもなかつたのです。彼らは一介の平信徒としてしか、キリスト教に関する知識をもつていなかったのです。そしてこのような者として、彼らは熱烈に自分なりの信仰を求め、自分なりに聖書を理解し、自分なりに聖書の教えを実践しようとしたのであります。ここで彼ら民衆宗教運動家の言葉と、高位聖職者や神学者やスコラ学者の言葉の違いが大変問題になります。聖職者がラテン語を使う世界を形成していたのに対して、民衆宗教運動家は俗語を使う世界に属しておりました。もちろん、聖職者はラテン語、平信徒は俗語という風に簡単に分れるものではありません。日常用語の世界で、両者は入り混じつておりました。けれども宗教用語は、典礼儀式において、さらには神学においてはラテン語のみが主体をなし、これを駆使する聖職者にのみ属していました。したがつて、宗教世界においては、神学者・聖職者のラテン語圏、新興市民層と商人化した貴族層の代表する民衆宗教運動家の俗語圏という風に分けることができると思ひます。

ここで、十二世紀・十三世紀の民衆宗教運動が俗語から、ないしはなほだ不十分なラテン語力から出発したと

いうことは、非常に大事なことではないかと思ひます。つまり俗語ないし不十分なラテン語力で読み書きしているということは、神学的意味ではもちろん、広く宗教的な意味でも、専門家ではなくむしろ素人であるということとであります。そのような素人が、玄人もはるかに及ばない熱意と関心をもつて宗教の世界に入ってきたのであります。夏目漱石の評論集の中に、『素人と黒人』という講演があります。その中でこういうことが言われているのです。専門家はあることを非常に狭く見て、それを深く掘り下げる。けれどもそれでは何か充分でないものがある。玄人にはわからないものがあるのである。そして素人がこれを見つけてるのである。それもただの素人ではだめである。即ち当の領域に何ら関心を持たない素人ではだめで、その領域に対して深い関心をもつ素人が、非常に大きな補いを専門家だけの世界に対してするのである。こういうことを漱石は言っております。

私もそれと同じように考えるのです。十二世紀から十三世紀にかけての新しいキリスト教理解—それは先ほど申し上げた意味ですが—がでてくるについては、言葉を異にするという意味で、宗教的に素人であった新興市民たちが、玄人の世界をのぞき込み積極的に働きかけるに

至つて生じた、と考えられるのであります。

その典型的な例として、十二世紀後半に発生したワルドス派を挙げてみます。一一七〇年頃、リヨンのワルドスという豪商が突然、宗教的な回心をしました。彼がなぜ回心をしたかについては、親友が突然死んだからという説もあります。けれどもこれはもつとも古い史料にはでてきません。それより確かなのは、彼が不正な儲けをしていて自責の念にかられたという動機であります。不正の儲けというのは金貸しのことです。史料には別に金貸しと明記してありませんが、金貸しと取つて間違いないと思ひます。教会が禁じていた金貸し業です。もちろん彼は金貸しだけをしていただけではありません。彼の財産目録が史料の中にでてきますが、あらゆる種類の事業に手をだしていたようです。そして金貸しを含め多くの事業であこぎな儲けをしていたと思われれます。

そうしたある日、彼はリヨンの町で吟遊詩人が歌っているのを聞いたのです。それは聖アレクシウスという人の物語でした。これは中世のフランス語、スペイン語、ドイツ語の俗語圏の中で非常にはやつた物語です。聖アレクシウスというローマ時代の聖人が、大変金持の女性と結婚する。ところが初夜に屋敷から逃げだして、東方

の荒野へ行き、貧しさのうちに修業を積む。そして帰郷するがやせ細った彼に気付くものはない。彼も豪壮な邸にもどろうとはせず、近くに貧しい庵をつくって寝起きし、一生を終る。彼が死んでしまつてから、家族がそれと気がつく、という話です。これを聞いたワルデスは大変感動し、吟遊詩人を家へ連れて帰り、その話について一々問いただしました。翌日、彼はリヨンの神学校の教授を訪ね、聖書について質問します。そこで幾つかの教えを示されたので、ワルデスはその中で一番大事なのは何か、質問します。すると教授は、「汝完全たらんと欲せば行きて汝のもてるものをすべて売り、これを貧者に施して後我に従え」(マテオ二〇・一二)を示したので、それでワルデスはこれだ、と思うのであります。ここでワルデスは回心に際して聖書の字義通りを受け容れたのであつて、神学者的な解釈とは縁遠い世界にいたのは確かであります。

かくしてワルデスは大財産をみな処分しました。妻に不動産を与え、二人の娘に持参金をつけてフォンテヴローの修道院に送りこみ、残つた動産をまき散らすように貧しい人たちに分け与えたのです。それから彼は、何も持たずあちこち巡歴して説教し托鉢するという生活に

入りました。そしてたくさんの方をえて、「ワルデス派」とか「リヨンの貧者」とか呼ばれるグループを作つたのであります。

このワルデスについて、ラテン語と俗語という問題を少し分析してみましょう。ワルデスは神学の教授のところへ行き、聖書について説明を求めました。即ち熱心に聖書を勉強しようとしたのだけれども、それがラテン語で書かれているので充分理解できなかったわけです。彼は豪商だったから、俗語は幾らでも読めたでしょう。そして吟遊詩人の歌っている言葉もよく理解できたでしょう。けれどもラテン語で書かれている聖書については、多少は解つたかもしれませんが、充分に理解できなかったと思われまゝ。それで、幾つかの教えを神学者に示してもらつて、その中で何が一番大事かと尋ねているのです。これは言葉の上での素人が専門家の世界へ入つていく際のあり方だと思ひます。

ワルデスの働きはそれだけにとどまらなかったのです。彼は聖書をフランス語に訳そうと考へました。彼は二人の聖職者を雇ひ、一人に翻訳を、一人に筆記を頼みました。これはまさに、一般民衆、つまり教えの上でも言葉の上でも素人だった者が、宗教専門の世界に立ち入つて、

そこに新しいものを見出し実践しようという試みであります。ワルデスは宗教をその道の専門家に委ねて安閑としていられない何かを感じていたのであります。これは画期的なことでありました。確かに聖職者の中には、聖書の内容を俗語でわかりやすく説く努力をした人は従来もありました。しかし平信徒であって聖書を俗語に訳させようという試みはかつてなかった例であります。

またワルデスは聖書のほかに教父たちの言葉を抽出してフランス語に訳させ、それを *Senteniae* (命題集) と呼びました。それがどういうもので、どういう風に使われたかは検討を要すると思います。けれども彼がそれを聖書解釈の参考にしたのではないと思われず。むしろ彼は、この箇条書きにした教父の教えを独立して覚えていったのであるかと思えます。そして聖書は聖書でフランス語に訳された全体を初めから終りまでできるだけ多く読んで、それからじかに教えを学び知ろうとしたことでしょう。なぜそう言うかといえば、ワルデスが訳させたものは、神学の専門家が使う教父の語録、例えば標準的註釈書 (*Glossa ordinaria*) やペトルス・ロンバルドゥスの命題集のようなものではないはずだからです。これらは、第一に膨大な分量になるものですし、教父の命

題が挙がっているだけでなく、それを説明する詳細な解説がついています。ワルデスからみれば、それはたとえ訳しても素人としての手に余るものであり、強い実践的志向をもつ信仰者にとって無用の長物であったでしょう。ワルデスは聖書について、一年は三六五日あるから、毎日一句ずつ覚えれば、年に三六五の聖句が覚えられると言いました。フランス語訳した教父の命題集も、ワルデス派は、一句一句棒読みに暗記していったと考えて誤りはないでしょう。

ここで特に重要な問題が生じます。それは宗教的素人としてのワルデスの聖書の読みかたであります。それは素人なるが故に斬新なものであります。従来の神学の専門家たちの解釈は、聖書の一句一句について、教父をはじめ諸学者の龐大な注釈によって多種多様な解釈を行うものであります。その場合には、確かに非常に綿密な研究ができ、その業績は評価されるべきものであります。けれどもそれだけ各部分について細かい解釈をすると、それらを総合して全体をつかむのが困難になります。聖書そのものの全体としての流れ、全体の話がつかみにくくなってきます。むしろ註釈に頼らず、全体として一気に読み下したら新しい意味が把握される、ということに



なりません。幸か不幸か、神学に素人であったワルデスには、そのフランス語訳聖書のほかには、参照にすべきフランス語の註釈書はなかったのです。だがここにこそ先人が気づかなかった新しい発見をする可能性があったと言えましょう。その新しいものとは、キリストの人間としての現世における生活の実相であります。ただしワルデスの場合には、キリスト自身よりも、その使徒たち、即ち直弟子たちの生活に関心がありました。この点あとにお話するアシジの聖フランシスコとの相違があるといえましょう。いずれにせよ、ワルデスは、使徒の生活にならって、財産を捨てて托鉢し、巡歴説教をしたのであります。ここに二つの言語圏、すなわち俗語という神学的に素人の言語圏と、ラテン語という玄人の言語圏の接触と摩擦があったといってもよいでしょう。玄人の言語圏に属していた宗教的遺産が、素人の言語圏に移されて、従来にない新しい意味をもったのであります。

ワルデスは一一四〇年頃生まれたとされます。もっともこれはワルデスが活動を始めた一一七〇年から逆算して割りだしたもので正確ではありません。また彼は一二一七年まで生きていたとも、もっと早く一一九七年に死んだとも言われます。いずれにせよ彼より一世代ほど後、

一一八一年ないし一一八二年にアシジのフランシスコが生まれました。また彼は一二二六年に亡くなっています。フランシスコはイタリアのアシジの町の富裕な織物商の息子であります。彼は若い時、武勲詩とか『ローランの歌』とか、騎士道文学に非常に熱をあげていました。彼は貴族と富裕な市民が形成する社交界の花形でありました。彼は織物商人としても優秀であったようです。回心してのちの彼は、「神の抜け目のない商人」(Cautus negotiator Dei)と呼ばれています。これから「神の」(Dei)という言葉をとれば、彼の回心以前の仕事ぶりをさしている、と言って間違いないでしょう。

彼については種々の解釈がありますが、私の調べた限りでは、初めは騎士になりたかったのであると思います。イタリア俗語、あるいはフランス俗語で書かれた騎士物語に夢中になりました。そして商人として富み栄えていたのですが、さらに手柄を立てて騎士になりたいと考えたのであります。彼は新興市民として社会的に上昇しつつあった点ではワルデスと同じでした。ただワルデスには、悪い金の儲けかたをした、だから全部の金を捨てて罪を償おう、という気持ちがありました。しかしフランシスコには金を儲けて悪かったという意識はありません

でした。むしろ世俗の世界の中で騎士というより高い地位を望んでいるうちに、地上の王様に仕える騎士では物足りなくなり、天上の王であるキリストに仕える騎士になろう、と考えるに至ったのだと思われまます。

フランシスコの回心は、一二〇六年から一二〇九年にかけて三段階で生じました。第一段階では自分がもつとも嫌っていた癩者に会い、そこにキリストのイメージを見て介抱したのであります。第二段階ではサン・ダミアノの荒れはてた教会で、十字架像に語りかけられ、その聖堂の修理をしたのであります。第三段階は、ポルティウンクラの聖堂でミサにあずかった時であります。彼はそのミサで読みあげられた福音の言葉に非常に感動しました。けれどもそのラテン語の意味がおぼろげにしか解りません。そこで彼はミサのあと司祭に、正確にどういう意味か問いただします。それはキリストが弟子たちを布教に送りだした時のメッセージでありました。金も銀も金銭も、袋も財布もパンも杖も持たず、履物も二枚の下着も持たず、神の国を述べ伝えよ、ということでありまます。これを聞いたフランシスコは、これこそ自分の欲するところである、といって托鉢と巡歴説教へ出発します。しかしワルドス派と違って彼は托鉢のみでなく、労

働によっても生活の糧をえました。

アシジのフランシスコとワルドスの間にはいろいろ似たところがあります。両者とも地上でのキリストの生活に従うという気持では共通であったと思います。ただワルドスはこの点で間接であったようです。つまりワルドスはキリストに従うといつても、むしろキリストの直弟子である使徒に従うという面が強かったのです。これに対しフランシスコは、使徒というよりもキリスト自身に對する隨順をめざしたといえます。その意味で彼は滑稽といえるほど何から何までキリストの行動を真似た生活をするのであります。

なおアシジのフランシスコの言葉の世界を考えてみましょう。彼は『アーサー王物語』、『ローランの歌』、『武勳詩』など吟遊詩人の世界に親しんでおりました。これはまさに俗語の世界であります。フランシスコはイタリア俗語のみでなく、フランス俗語をよく知っていました。彼は非常に感激した時には、フランス語で歌い、フランス語で語つたと伝えられています。これは彼の母の国の言葉ですし、彼自身、商売にいった地方ですから当然といえるであらう。

またフランシスコは大商人ですから、読み書き算数の

教育は受けたわけです。俗語の読み書きはもちろんですが、ラテン語も初歩は習得したのであります。即ちサン・ジョルジョという教会の司祭から習っていました。ただし神学者や高位聖職者ほど深く学んではいかなかったのです。その程度が回心の第三段階における彼の反応によく現れています。即ちミサで福音がラテン語で読みあげられるのを聞いて、大体わかる。それで非常に感激する。しかしつかんだものは、おぼろげである。そこでミサが終ってから神父をつかまえて、今の福音は正確にはどういう意味ですか、と問いただすということになるわけです。フランシスコは、俗語の世界においてラテン語による宗教の世界に対しては素人であったのが、宗教に対する強い関心の故に、言葉の障壁を越えて専門家の領域へ入って行き、玄人ですら見出だしえなかつたものを発見したのであります。そしてこの点でフランシスコとワルドスの共通性が認められると思っております。

ただここに、宗教的な意味でも言葉の面でも、フランシスコはワルドスと重大な違いがあると思われるのです。それは第一にフランシスコがイタリア人でワルドスがフランス人であったことと関係があります。即ち、フランス語とラテン語の差異が、イタリア語とラテン語の差異

よりはるかに大きい、ということですが。フランス人であるワルドスは、ラテン語の聖書が殆んど読めず、聖職者を備ってフランス訳の聖書を作らせなければなりません。これに反し、イタリア人であるフランシスコは、ラテン語の聖書をかなりな程度まで読めたので、聖書をイタリア語に訳さす必要はありませんでした。それどころか、ミサで読みあげられる聖書のラテン語を聞いて、ほぼ理解するほどでありました。このことは、イタリアでは、フランスよりも、少くとも言葉について、素人と専門家の差異が小さかつたということを意味します。ということとは、イタリアでは、素人の新しい信心が勃興した際、その中に玄人のもっていた伝統的な信心がフランスにおけるよりも豊富に残つたと推論してもよいのではないかと思ひます。

第二にフランシスコとワルドスの違いは、ワルドスが純粋な平信徒であつたのに対して、フランシスコが助祭(diaconus)という下級聖職者であつた点であります。フランシスコが助祭であつたことを否定する説もありますが、チェラーノのトマスの『第一伝記』という最古の資料やボナヴェントウラの『大伝記』にも助祭(diaconus)という言葉が現われているので、まず間違

いないといつてよいでしょう。ただ彼がいつ助祭になつたかが問題になりますが、さきほどお話しした彼の三段階にわたる回心以後ということは確かであります。即ち彼は回心以後、助祭になるための勉強をしたのであります。即ち説教を許される資格をとるために学んだといつてもよいと思います。彼は生涯神学者にはならなかつたし、高位の聖職者にもなりません。そして彼の本領は、民衆宗教運動家としての新しいカリスマであり、イタリア俗語を通じて求められ語られるものであります。しかし彼の助祭という地位が示しているように、彼は伝統的教会に関する知識とラテン語圏に属する知識を必要最低限習得したのであります。ボナヴェントウラの『大伝記』によると、フランシスコは回心する前からキリスト教についてある知識をもっていたけれども、回心以後、自分の勉強で深めていった、と言われています。これはワルデスにはなかつた面であると言つてよいでしょう。

ここでワルデスとフランシスコが民衆宗教運動家としてあげた成果を較べますと、その内容の豊かさは段違いにフランシスコが優つています。ここでその内容を詳しく説明することはできませんが、フランシスコが小鳥に説教し、太陽の歌をイタリア語の最初の詩として作り、

クリスマスの劇を創始し、最後にキリストの傷痕を身に帯びて死んでいったことを思い起すだけで充分です。ワルデスにはない華麗さと深さがみられます。両者とも地上で貧しさのうちにさまよいながら教えを説き、人を救うために悩み苦しんだキリストの姿を新たに発見したと言つても、フランシスコとワルデスではイメージインの量においても質においても格段の差があるのであります。

この相違の原因を我々はどこに求めるべきでしょうか。もちろん二人の個人的資質にそれを求めるべきは当然であります。けれども、それだけでは不十分なように私には思えます。私はさきに新しい信仰は新しい言葉と共に、地上における人間キリストのイメージは俗語と共に、と申しました。けれども今、私はこれにある補足をしなければならぬ、と思うのです。なるほど新しい信仰は新しい言葉、即ち俗語と共に現われるが、それが真に偉大な成果を上げるためには、伝統的・専門的な言語即ちラテン語とその宗教的遺産を少しでも多くとりこむことが必要なのではないのでしょうか。イタリア語を母国語としたフランシスコは、フランス語を母国語としたワルデスよりもこの点で有利な位置にありました。そしてまた古

い宗教的遺産をもとりこむために学んだフランシスコは、その面で貧弱であったワルデスより、新しい精神に十分な厚みをつけることができたのであります。伝統と創造の共存するところに真の進歩が生まれるという原理の典型がここにみられるように感ずるのであります。

以上、西欧中世における民衆宗教運動と言語の問題を、ワルデスとフランシスコという二人の人物をとりあげて論じて参りました。この新しい信仰と新しい言語の関係は、このほか、ドイツ神秘主義者のドイツ語説教についても、イングランドのピアズ・プラフマンについても、ボヘミアのアッカー・フォン・ベーメンについても、シエナのベルナルディーノのイタリア語説教においてもとりあげうるでしょう。またダンテやペトラルカにおけるラテン語作品とイタリア語作品の関係についても問題になります。さらに今日の主題と特に関係する意味で、ウイクリフとロラード・バイブル、ルターのドイツ語訳聖書、テオドール・ベーズのフランス語訳聖書などが挙げられます。私のたてましたテーゼに御批判頂くと同時に、これら今日私の扱いえませんでした領域についても御教示頂ければ幸いに存じる次第であります。